

2017年7月9日聖学院教会聖日礼拝説教

「人生の避難所」
詩編 46 編 1-11 節

菊地 順

先週の水曜日から、九州の北部に記録的な豪雨が降り、甚大な被害が出ています。亡くなられた方も多数出ています。短時間に川が氾濫し、流木が流れを塞ぎ、茶色い泥流が街の中に押し寄せました。そして、多くの家屋が壊滅的な被害を受けました。中には、家屋そのものが激流に流され、跡形も無くなくなった家々もあります。本来は、人の命と生活を守るはずの家屋が、壊滅的な被害を受けています。

こういう自然災害は、山地の多い日本では、なかなか避けることが難しい災害なのではないでしょうか。イエス・キリストは、砂の上に家を建てた者と岩の上に家を建てた者との譬えを語っていますが、今回被害に遭われた人たちも、それぞれが頑丈な堅い土地に家を建てたと思っていたのではないのでしょうか。しかし、予想をはるかに超える豪雨によって、大丈夫だと思っていたところにも激流が押し寄せ、家が破壊され、また家屋そのものが流されてしまったのだと思います。しかし、毎年繰り返されるこうした災害を目の当たりにしますと、改めて、岩の上により堅固で安全な家を建てることの大切さを痛感させられるのではないのでしょうか。

しかしまた、最近では、繰り返し生じるこうした家屋の喪失ということだけではなく、新たな避難所の確保ということが話題になっています。特に、北朝鮮の繰り返される核実験とミサイルの発射実験を受けて、日本でも核シェルターの売り上げが増え、放射能物質を排除する空気清浄器の売り上げが急増しているというニュースが、昨今報道されています。少し過剰な反応とも思えますが、諸外国と比較すると、むしろ日本の方が異常だとも言えるかもしれません。たとえば、ある資料によりますと、スイスやイスラエルでは核シェルターの普及率は100%です。アメリカやロシアでも約80%に達しています。アジアではシンガポールが54%で、一番多く普及しています。それに引き換え、日本はわずか0.02%で、世界から見れば核に対する警戒感が非常に低いとも言えます。低いと言うより、全くないと言った方が正しいのではないかと思います。世界で唯一の被爆国であるにもかかわらず、核に対する危機感が全くないというのが現実ではないのでしょうか。これでは、日本は、核に関して言えば、砂の上に家を建てた愚かな者に似ているとも言えるかもしれません。

こうした状況を振り返りますと、わたしたちは、今改めて、わたしたちの生命と財産を守るためのより安全な建物が必要であるということを認識させられるのではないのでしょうか。それは、6年前に起こった東日本大震災の時から、日本全体に課せられた新たな課題であるとも言えます。しかし、それと同時に大切なのは、そうした外部の建物だけではなく、わたしたちの内部の建物ではないかと思えます。わたしたちの内側にも、堅固な建物、避難所を確保することが大切なのではないのでしょうか。人間は物理的・肉体的に存在すると同時に、精神的にも存在するものです。それは、生活するための建物が必要であるのと同じように、自分の意識と気持ちをしっかり保ち、守るための内面の建物も必要なのです。そうした内なる建物、内なるシェルターを造ることが大切なのです。そして、その内なる建物、内なるシェルターについて繰り返し語っているのが、今日わたしたちが紐解いています旧約聖書の詩編ではないかと思えます。

今日の聖書箇所である詩編 46 編には、こう書かれています。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」。一つ前の口語訳聖書では、「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである」と訳されています。神は「わたしたちの避けどころ、わたしたちの砦」であると言うのです。困難に遭ったとき、わたしたちが真っ先に避難し、災害を逃れることができる避難所、それが神だと言うのです。2 節と 3 節では、こう語られています。「わたしたちは決して恐れない／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも／海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも」。この言葉は、今回の自然災害を想起させるような描写ではないのでしょうか。しかし、それほどの災害が起こっても、「わたしたちは決して恐れない」と言うのです。なぜなら、「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦」であるからだと言うのです。

この詩篇 46 編では、「神はわたしたちの避けどころ」という言葉が繰り返し語られています。ただし、今皆さんが手にしている新共同訳聖書では、あとのところは「ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」と訳されています。口語訳聖書では、そのところもすべて「避け所」と訳され、この言葉が 3 度繰り返されています。また、この言葉は、この詩篇 46 編だけではなく、詩篇全体でも繰り返し語られています。先ほど交読詩編として一緒にお読みました詩篇 91 篇にも、神は「わたしの避けどころ、砦／わたしの神、依り頼む方」と歌われています。そのように、詩篇では、繰り返し「神はわたしたちの避けどころ」であると謳われています。そして、その中でも、この言葉が繰り返し強調されているのが、この詩篇 46 編なのです。そして、この詩篇は、多くの人たちに生きる力と励ましを与えてきたのです。

今年は、宗教改革 500 周年の記念すべき年ですが、宗教改革者の立役者であ

るマルティン・ルターも、この詩篇 46 編によって大いに力づけられ、また励まされた人でありました。そして、ルターは、この詩篇 46 編に基づいて讚美歌を作成しました。それが、この後に歌います讚美歌 267 番です。この讚美歌は、一般に「かみはわがやぐら」という最初の歌い出しの言葉で有名な曲です。ちょっとお手元の讚美歌をご覧いただきたいと思います。267 番という番号の下に、ドイツ語の題名が、「Ein' feste Burg ist unser Gott」と記されています。Unser Gott、我々の神は「Ein' feste Burg」だと言うのです。「ブルク」というのは、城塞という意味です。街全体が厚い城壁と堅固な門から造られ、一つの城のような形をなしているのが城塞です。ちなみに、ドイツの地名には「～ブルク」と語尾に「ブルク」と付く地名が多くあります。ちょうど昨日までドイツで G20 が開催されていましたが、その開催地のハンブルクも「ブルク」という語尾が付いています。ちなみに「ハン」というのは港と言う意味で、「ハンブルク」とは港湾に造られた城塞都市という意味です。ついでながら、ドイツの地名にはハイデルベルクといったように「～ベルク」という語尾を持つ地名も多くありますが、それは「山」とか「山城」という意味です。

ところで、この「ブルク」という言葉に feste という言葉が付いていますが、それは「頑丈な」という意味です。ですから、全体として、我々の神は「頑丈な城塞」であるという意味になります。ルターは、詩篇 46 編の、「神はわたしたちの避けどころ」という言葉に基づいて、神はわれわれの頑丈な城塞であると謳ったのです。またこの「ブルク」という言葉には、城塞という意味以外にも「避難所」とか「保護者」という意味もありますから、ルターはそういう意味も込めて、神は「頑丈な城塞」であると謳ったのです。この言葉は、おそらくドイツ人たちには感覚的にもよく理解できたのではないのでしょうか。ドイツに行くと、この城塞が各地にあります。昔、人々は頑丈な城塞を造って敵の襲撃から街を守り、家族と財産を守ったのです。その城塞のように、神はわたしたちを守って下さると、ルターは謳ったのです。そして、ドイツの人たちも、そうした実感を持って、この讚美歌を歌うことができたのです。

それでは、「神はわたしたちの避けどころ、砦」であるということ、わたしたちはどうしたら知ることができるのでしょうか。それは、結論的に言えば、神に信頼する以外にはないと思います。神を信じ、神を信頼するとき、この確信が与えられて行くのです。そして、神への信頼が深まれば深まるほど、わたしたちは容易に神に逃れて行くことができるようになるのです。それは、避難訓練に似ているところがあるかもしれません。聖学院大学でも年に一度避難訓練をしています。逃げる先は運動場です。そこが避難所です。いざとなったら、そこに逃げるのです。そこは建物もなく、キャンパスの中ではより安全なところだからです。そして、普段から、そこに逃げる訓練をしておくことが大

切なのです。なぜなら、いざとなったとき、容易にそこに向かうことができるからです。行く場所が定められ、そこに行くことが訓練されていると、いざというとき、容易に行動を起こすことができるのです。しかし、それは、そうした外的な災害のためだけではなく、内的な災害のためにも必要なのです。困難な状況に遭遇し、にっちもさっちもいかなくなるとき、逃れるところが必要なのです。そして、そこに逃れる訓練をしておくことが大切なのです。その逃れる先は、いろいろあるかもしれません。友人であったり、親であったり、あるいは教師であったりするかもしれません。しかし、人生の深刻な問題においては、人間は無力なものです。そして、その無力さを知ったとき、人は神を頼らざるを得なくなるのです。しかし、それは決して恥ずべきことでも、不名誉なこともありません。むしろ、子供が親に頼るように、それはごく自然のことなのです。そして、それは自然のことであるばかりか、人間にとってふさわしいこともあるのです。なぜなら、聖書によれば、神こそ人間に命を与え、人間を慈しみ育てる父なる存在であるからです。ですから、その神に信頼することが大切なのです。そして、絶えずその神へと立ち返る訓練をすることが大事なのです。

わたしたちキリスト者は、毎週日曜日ごとに礼拝を守っていますが、それは、言ってみれば、神に信頼し、神へと立ち返る訓練をしているようなものなのです。そうした訓練の中で、いざというとき、神へと容易に逃れていくことができるのです。そしてまた、人生のさまざまな災難から救い出されていくのです。そして、そうした訓練の中で、神こそ「わたしたちの避けどころ」であるとの確信が深められていくのです。

しかし、その訓練は、日曜日だけのものではありません。日曜日以外の日々の生活においても、その訓練は繰り返されるのです。そして、それは、絶えず聖書の言葉に触れながら、祈りにおいて行われています。と言うよりも、わたしたちは、絶えず聖書の言葉に触れ、祈りをもって神に立ち帰らなければならないのです。もっと言えば、わたしたちは祈りにおいて、神に逃れていくのです。しかも、急いで逃れて行くことが必要なのです。自分の中に、何か悪い思いや自分や人を損ねるような思いが起こったとき、わたしたちは、直ちにそれから逃れるために、神へと逃れなければならないのです。人間の心には、実にいろいろな悪い思いが潜んでいます。パウロは、ガラテヤ書の中でこう語っています。「それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像崇拜、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他」この類のものが、人間の心には潜んでいると言うのです。そうした悪い思いが起こったとき、わたしたちは直ちにそれから逃れなければならないのです。そして、それは、神へと逃れることによってしか、逃れることはできないのです。そして、それ

を実現するのは祈りなのです。祈りにおいて、神へと逃れて行くのです。その場合、その祈りは必ずしも整った祈りではないかもしれません。むしろ、整った祈りはできないかもしれません。祈れるのは、ただ一言、「神よ」としか祈ることができないかもしれません。あるいは、「主よ」、「父よ」としか祈ることができないかもしれません。しかし、それでも十分なのです。その祈りの中で、わたしたちは神へと逃れることができるのです。

皆さんは、コルベ神父をご存じだと思います。アウシュヴィッツで、一人の男性の身代わりとなって、自ら餓死室へと下り、そこで亡くなったカトリックの司祭です。このコルベ神父について、たくさんの伝記が書かれ、またコルベ神父が遺した言葉も集められて出版されていますが、そうした書物を通して知らされることは、コルベ神父は絶えず祈る人であったということです。そして、祈りの中で神に逃れ、神と一つであることができた人であるということです。その祈りについて、コルベ神父は、大変興味深いことを言っています。それは、いざというときは、短く祈るだけで十分だということです。また短くしか祈れないということです。たとえば、突然深い不安が襲ったとき、神の名を呼ぶことしかできないと言っています。そしてまた、それで十分であるとも言っています。なぜなら、その瞬時の短い祈りであっても、神は十分に応えて下さるからだと言うのです。コルベ神父は、その祈りに名前を付けていますが、それは日本語訳では「射禱」と訳されています。発射の「射」に祈禱の「禱」を結び付けて、「射禱」と訳したわけです。具体的に言えば、「神よ」と祈ることです。あるいは、「主よ」、「父よ」と祈ることです。その一言の祈りであっても、神はそれに応えて下さると言うのです。そして、神へと逃れ、神の平安を得ることができると言うのです。悪い思いが込み上げてきたとき、怒りや妬む思いが湧き上がってきたとき、不安や恐れが急に心を捉えたとき、直ちに「神よ」と祈るのです。あるいは、「主よ」、「父よ」と祈るのです。そして、「清めたまえ」「強めたまえ」「守りたまえ」と祈るのです。そのように、瞬時に神に逃れ行くことが大切だと言うのです。そうしないと、わたしたちは激しい怒りに捉われたり、深い妬みに苛まれたり、大きな不安に襲われたりするからです。そうならないように、瞬時に、神に逃れなければならないのです。そしてまた、そのようにして、神ご自身をわたしたちの「避けどころ」「避難所」としていかなければならないのです。

しかしまた、同時に、じっくりと祈ることも大切です。特に、繰り返し、繰り返し、自分に敵対する者や、また自分の感情や存在を損ねる事態が生じるとき、わたしたちはそのためにじっくりと祈らなければなりません。主イエスは、「汝の敵を愛せよ」とお教えになりました。そして、「汝を迫害する者のために祈れ」と教えられた。敵とは、より具体的には迫害する者のことです。そして、

その迫害する者を愛するという事は、その者のために祈るということなのです。そして、その祈りにおいて、相手に歩み寄ることなのです。それは、それ以外の仕方では、その対立を克服することはできないからです。ある人は、愛とは水のように言っています。水は絶えず低いところ、低いところへと下って行きます。そして、下って行ったところで、その形と同じ形になります。そこが四角であれば四角に、丸であれば丸くなります。そのように、愛は完全に相手に合わせて自分を変えて行くのです。そのようにして、相手と一つとなって行くのです。そしてまた、その中で、初めて相手も変えられ、真実の和解へと至ることができるのです。そして、それを実現するのが祈りなのです。じっくりと祈られる祈りなのです。そうした忍耐深い祈りも、また大切なのです。そして、その祈りにおいて、わたしたちは、たとえ迫害の嵐が吹きすさぶとしても、神を「わたしたちの避けどころ」、「人生の避難所」とすることができるのです。

詩篇 46 編の作者は、「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」と語りましたが、この言葉自体が祈りでもあるのです。詩編作者はそう祈ることにおいて、正に、神を「人生の避けどころ」、「避難所」とすることができたのです。そして、その祈りにおいて、絶えず神の助けを与えられて行ったのです。

生活をしていくためには、自然災害にも耐え得るしっかりとした建物が必要です。しかし、それと同時に、人生を襲うさまざまな苦難にも耐えることのできる内なる避難所も必要なのです。聖書は、それは神ご自身であると語ります。神こそ、人生の「避けどころ」「避難所」とであると語ります。今日、ここにお集まりの人たちの中に、まだ人生の避難所を持たない人がいましたら、是非、今日の聖書の言葉をかみしめて欲しいと思います。そして、神ご自身を「人生の避難所」として受け容れてほしいと思います。